2010/10/17

唯物論研究協会・第 33 回研究大会
個人研究発表（Ｌタイプ）

縁辺化の進む地域における高校生の将来展望と地元志向
―自己の創発に着目して―

北海道大学大学院教育学院
博士課程　窪田　玲奈（くぼた　れな）

1. はじめに

近年、全国の若者の移行の困難に焦点を当てた研究が増えてきている（例えば乾彰夫氏ら）。進路形成にあたって、家庭における経済・文化資本の多寡に加え、若者を包む労働環境、現代の社会文脈の問題が大きく顕在化してきている。また、地方と都市の就業構造の違いから、地域間格差へ目を向ける必要性も示唆されてきている（李永俊・石黒格 2008，上間陽子 2007）。

これまで、多くの若者研究がなされてきているが、それらの多くは「高校から進学」、「高校から仕事」へといった「移行」という観点から語られてきた。しかしながら、新規学卒採用システムが崩れた結果、そのような「スムーズな移行」ではなく、「複雑な移行」を経験する者が増えており、若者の進路は多様化している[1]。若者達は、「自分の判断でルートを選ばなければならない」状況下に置かれるのだが、それは簡単なことではない。現代は、「大人になる」ということが非常に困難な時代なのである。「『標準的』な『大人』への『移行』を想定することができない環境」に置かれているのであり、若者達は「自前の『移行』」を作り出さなければならないのだ[2]。

本報告では、北海道の空知管内に位置する夕張高校の 3 年生に焦点を当て、将来展望と地元志向について考察していく。そのうえで、地方都市における若者の自立と高校教育・公教育の役割について考えていく際に必要とされる視点を提示したい。

2. 調査対象と方法

(1)夕張市の概況

北海道の空知地方は炭鉱で栄えた町が多く、閉山後は主たる基幹産業が抜け落ち、地域経済の衰退が著しい地域である。特に、夕張は財政再建（再生）下の自治体として、全国に一躍名を馳せることとなった。夕張市の人口は、炭鉱が栄えていた当時は 10 万人を超えていたこともあったが、今はその 10 分の 1 ほどに過ぎない。2010 年 9 月末の時点で人口は 11,012 人（6,012 世帯、男性 5,138 人、女性 5,874 人）である。財政破綻の前から人口は漸減していたものの、劇的とまでいかないが、2006 年、2007 年以降の破綻後の人口減は以前よりも大きくなっている（グラフ 1）。

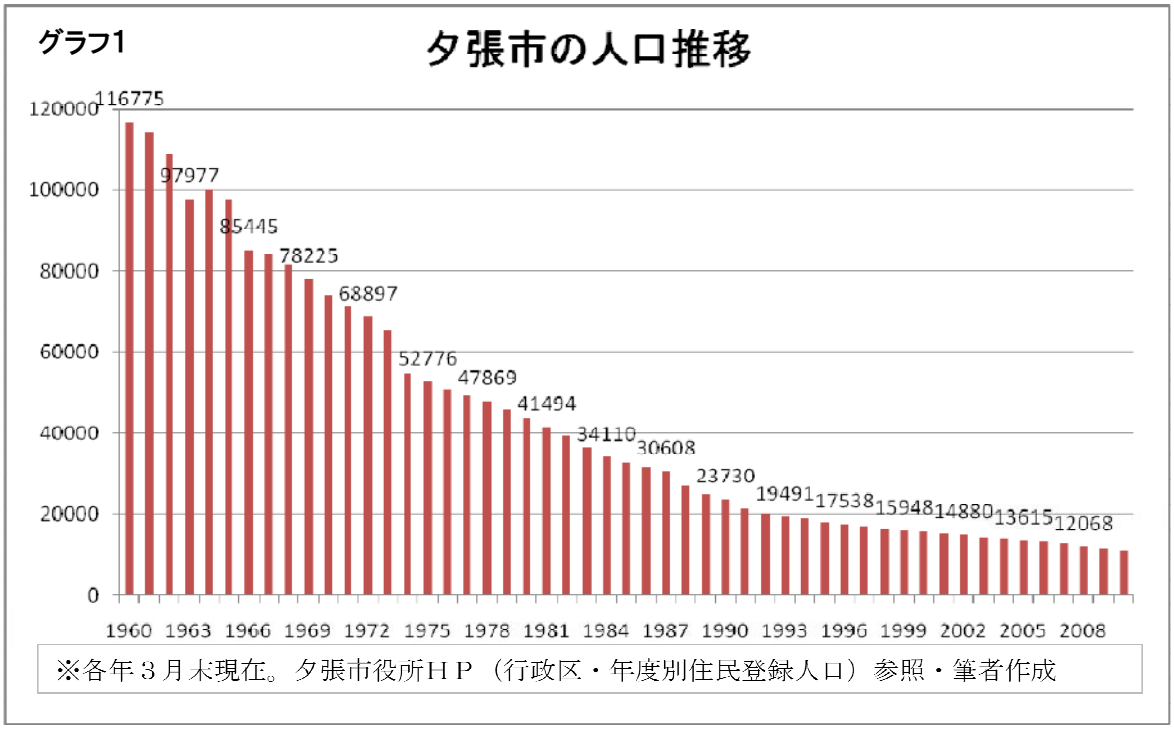
2007 年 3 月 6 日に、財政再建団体に指定され、平成 18 年度～平成 36 年度までの 18 年間が計画

---

[1] 竹石聖子，2006,「第 10 章『地元』で生きる若者たち」，乾彰夫編,『18 歳の今を生きぬく――高卒 1 年目の選択』，青木書店，p. 228

[2] 中西新太郎・高山智樹編，2009,『ノンエリート青年の社会空間―働くこと、生きること、「大人になる」ということ』，大月書店，「はじめに」参照。

期間として設定され、赤字解消額は 353 億円とされた[3]。財政再建（再生）下において、市の事業は大幅に縮減されることとなった。現在も財政再生計画の下、粛々と返済計画が進められ、全国最高の税負担と全国最低の市民サービスが強いられている。「国が地方財政緊縮化の『見せしめ』にするために、夕張という地を舞台に選んだ『憲法違反の実験』（格差社会の最先端で、どこまで憲法を骨抜きにできるか）だと思っている。[4]」という本田氏（朝日新聞夕張支局の方）の指摘にあるように、夕張では憲法 25 条で保障されているはずの生存権を脅かすような生活を余儀なくされている。「日本っていう国を一つの街で体現したみたいな」と高校生に語らしめる街なのである。



※各年３月末現在。夕張市役所ＨＰ（行政区・年度別住民登録人口）参照・筆者作成

(2)高校生に脱出を迫る町・夕張

財政破綻は地域経済の衰退にさらなる拍車をかけている。夕張で暮らす子ども達の親御さんの経済状況にも影響を与え、それが子ども達の暮らし、進路選択にも影響してきている。夕張高校への調査の際には、お昼休みに食べる昼食を用意することすらできない子もいるという話であった。また、年収が 200～300 万円台という家庭が普通で[5]、市役所に勤めている保護者でも給料が大幅にカットされているために、かなり厳しい状況にあるそうだ。雇用の面から見ても、夕張に残って仕事を見つけるのは難しく、親御さんに子どもを囲う余裕もないのだ。さらに、リーマンショック以降の不況による影響から、数少ない地元企業への就労の道も狭き門となっている。

---

[3] 国立社会保障・人口問題研究所（東京）の推計に基づき、再建計画の終了時の夕張市の人口は約 7,300 人と見込まれているが、働き手の流出加速は一切考慮されていない。実際には、推計の２倍のペースで人口が減り始め、計画初年度から誤算が生じているという。(『北海道新聞朝刊』2008/03/04, 1 ページ参照）なお、2010 年に入り、財政再生の計画期間は平成 41 年度までの 21 年間（実質 17 年間)、赤字解消額が本年度より 322 億円と公表されている。

[4] 本田雅和，2008,「特集　格差社会の最先端・夕張から―机上の空論、人権侵害の再建計画の違憲・違法性」,『法と民主主義』(2008/10 No. 432)，p. 21

[5] 進路指導の教員の方への聞き取り調査から。家庭の暮らし向きについては、生徒へのアンケート調査では尋ねているが、親御さんへの調査は行っていないため、正確な年収については把握できていない。中小零細事業者の実態については、以下の論文から窺い知ることができる。川村雅則・河西勝，2009「夕張　調査研究ノート（Ｉ）――夕張における中小零細事業者の経営実態と課題」,『北海学園大学経済論集』第 56 巻第４号，北海学園大学, pp.　229-63

(3)夕張高校について

夕張市にある高校は現在、夕張高校の１校のみである（各学年２間口）[6]。地理的な問題もあり、中学校と高校の間で、入試による輪切りが起こらないため、都市型とは異なる、多様な学力の生徒を含みこむ形での進路多様校となっている[7]。卒業後の進路は、大学・短大への進学、専門学校への進学、就職が毎年大体３分の１ずつとなっている。

進学資金を確保できないという問題が年を追うごとに深刻化している中でも、安易な就職への鞍替えはさせないという指導方針をとっている。進学から就職へという子もいるが、学校としてはそうはさせたくないと考えており、いかに気持ちを持ち上げて進学につなげていくかであるという。親の仕送りがゼロであっても可能な進学を勧めている。そのため、学費負担の小さい国公立に入れるような受験指導を行っている。

「…*夕張は、閉ざされたというか、こう、空間としてやっぱり、こう、隔絶された地域ですから。その、じゃあ、札幌に行って、いきなり札幌の、その人馴れした子達と即渡り合えるかっていうとね、どうしてもこう内気で、こう、後ずさりしてしまうような子達っていうのも多いんですよね。だから、そこでこううまく適応していくためには、高校卒業した後、もう１つクッションが欲しいということですよね。*[8]」

卒業後に外の世界を知って、ワンクッション置いてから社会に出て行くことを念頭に置いた進路指導をしている。その背景には、内向きの気質の高校生への配慮と共に、高卒労働市場の厳しさがある。単純化された労働、離職率の高さ、雇用条件の悪化などに見られるように、就職はある程度リスクを負わなくてはならない進路になってきている。そのため、半分社会に出る形で、専門学校・短大・大学に行ってもう少し視野を広げたうえで選択していく方がベターだと考えているのだ。

但し、「うちは余裕ないよ」という親の気持ちが伝わるためか、中途半端でいい加減な大学志望はほとんどないという。進学希望者の 85%が日本学生支援機構の奨学金を申請しており、高校生のうちからアルバイトをしてわずかずつでも貯金をして、自分の学費に当てる者もいる。

調査対象・方法

①進路指導部教員へのインタビュー調査（2008 年 8 月、2009 年 4 月）

②高校３年生を対象にアンケート調査「高校生の将来展望と地元志向に関する調査」

・2009 年 7 月中旬実施・回収（50 分の授業時間内で実施）

・夕張高校３年生２クラス（欠席者もいたため、68 名中 57 名の回答）

③インタビュー調査

・2009 年 9 月 17 日ならびに 24 日（50 分の授業時間内で実施）

・夕張高校３年生 15 名より聞き取り

---

[6] 高校は将来的には１間口となると予想されている。ただし、地元の高校生が 100%で、交通網の関係上、近隣の町への通学が困難な地域があるため、廃校は免れて、栗山高校のキャンパス校となるのではないかと考えられている。

[7] 中学校卒業者のうち、１割近くの生徒は、市外の進学校へと進学する（メロン農家の跡を継ぐという生徒で、近隣の農業高校へ進むというルートも若干見られる）。その場合は下宿や送り迎えなど、何らかの形で地理的な問題をクリアしているようだ。基本的には市外への通学は、公共交通機関の関係上難しいらしい。

[8] 2008 年８月の進路指導教員へのインタビュー調査より

3. 考察の視点

①「変身」、「つくり替え」という視点からみる「成熟」――「移行」論の限界

先にも触れたように、現代社会では「『標準的』な『大人』への『移行』」を想定することが難しく、若者達は「自前の『移行』」を作り出さなければならない。そのため、「移行」というような、徐々にステップを踏んで、少しずつ「大人になる」というような見方は、あまり適切とはいえないのだ。よって、筆者は、「大人になる」、「成熟する」という過程を、「変身」、「つくり替え」を迫られるという観点から考察していくこととする[9]。

②地続きとはいかない進路選択――市場モデルとして議論できない夕張の非-連続性

夕張高校の生徒の場合、先に①で触れた現代社会の特質に加え、「貧困」と「地理的断絶」という要因が加わり、「自前の『移行』」ルートを選択する際には、さらに複雑さと困難を伴うこととなる。「貧困」によってなおのこと意識に浮上する「子ども」―「大人」間の「非 - 連続性」、「地理的断絶」により、家族の下を離れなくてはならないことを余儀なくされることによる「非 - 連続性」と地続きとはいかない進路選択が迫られる点に着目しながら考察する。

③地元志向――彼・彼女らにとっての夕張

地元志向に関する先行研究として、「地元つながり[10]」に着目する新谷氏（2007）や芳澤氏・上間氏（2007, 2008）がある。双方の研究とも、地元のネットワークと連帯が相互扶助ネットワークとして機能し、また、ストリートダンス、エイサーという文化活動が青年達の実存の支えとして機能している点を指摘している。「地元つながり」に着目した、地元で生きていくうえでのネットワークが、青年達にとっての貴重な資源として有効に機能し、支えとなっていくという点は、地方を対象にした研究を行なっていくうえで、非常に示唆に富むものである。

しかしながら、夕張の場合、都市近郊のようにフリーターという選択肢を取ることや沖縄のように相互扶助を期待できる地域ではない。そのため、地元に残って「何とか生きていく」という選択肢が想定しにくい。その中で、夕張という地に対する想い、「地元志向」はどのように立ち現われてくるのかを考察する。

以上の３つを視野に入れ、後期モダニティにおける若者の「成熟」、「大人になること」の問題について考察していく。北海道における圧倒的な地域格差の下では、地元に残るにしても、離れるにしても格差の乗り越えをしていくことになる。その際の〈構え〉の形成から「成熟」の姿を見ていく。

---

[9] 中西氏は、J.コテの議論を手がかりとしながら、子どもたちが「新しい種類の大人」になっていること、「『変身』への成長イメージの転換」、「無力の自認をつうじた成長」が起こっていることに着眼しており、今という「現実」のうえに立って、成長の変容の意味を捉えることの必要性を提起している。（中西新太郎，2007,「幼稚になるという成熟―消費社会化と成長・自立像の変容」,『現代と性をめぐる９つの試論―言語・社会・文学からのアプローチ―』, 春風社，pp. 6-30）

[10] 家庭でも学校でもない場所（＝ストリート）に居場所を見出し、活動する彼らは、進学・就職のための活動をせず、フリーターという選択を容易にする。そんな中、場所、時間、金銭を共有してお互いの生活を支えていくという、地元で生きていく関係を築いている。その関係を新谷氏は、「地元つながり」と呼んでいる。パーソンズの用語にならい、道具的機能（生活手段を得ることを可能にする機能）、表出的機能（情緒安定を可能にする機能、居場所感）という２つの機能と関連づけた考察も行なわれている。高校を中退した友人を介しての地元つながり、つまり擬似地元つながりの中に入っていった進学校に在籍していた青年は、他の道も可能であったろうに意識的にフリーターを選択している。また、一旦進学・就職を目指すがその時は共に進路に向かう同志がいなかったためかうまくいっていない。そして、再びフリーターになると、擬似地元つながりによって表出性が満たされているために、現況を維持していくことができている。表出的機能の青年にとっての大きさと、それが道具性を伴わないということが表れている。青年の支援を考えていく時に大切になってくる視点であるように思う。

4. 生徒達の将来展望と地元志向

(1)地元を「出る／出ない」に関する希望

＊ほとんどの者が出たいという希望

「このままずっと夕張に住んでいたい」7.3%（４名）
「一度は夕張の外に出て暮してみたい」43.6%（24 名）
「夕張の外に出て戻ってくるつもりはない」40.0%（22 名）
「特に希望はない」9.1%（５名）

将来の生活の場所の希望については、全体の８割を超える者が出たいと考えている。その背景としては、働く場所や進学先が市外にあること、外の世界を知りたいという気持ちが見られる（グラフ２、３）。Ｕターン志向については、今の段階では「外に出て戻るつもりはない」と考えている者が多い。（グラフ４）

(2)進路分岐

アンケートを実施した７月時点において、高校卒業後の進路希望は、回答者 57 名中、就職希望者が 16 名、進学希望者が 40 名、まだわからないという者が１名である。進学希望先としては、４年制大学が 19 名、短大が３名、専門学校が 16 名、「まだ迷っている」が２名であった。

また、インタビュー対象者 15 名の進路分岐は以下の通りである。（ID 番号は、アンケートの調査票に便宜上振った番号をそのまま使用している。）

【就職志望】―５名（男子３名、女子２名）

ID：㉕　男子　体を動かす仕事がしたい・某パン製造会社を受験、結果待ち
ID：⑬　男子　札幌などの発展したところに行って働く
ID：㉚　男子　相撲の行司になるために東京へ行く（内定済み）
ID：㊶　女子　地元に３年残って、介護士の資格を取る
ID：㊻　女子　美容師の見習いになる　夕張から通勤（内定済み）

【専門学校進学志望】―４名（男子２名、女子２名）

ID：㊷　女子　小児クラークになるため札幌の専門学校へ（ＡＯ入試合格済み）
ID：㊱　女子　保育士になるため札幌の専門学校へ
ID：㊾　男子　東京の映画系の専門学校に行きたい　俳優になりたい
ID：㉙　男子　札幌の調理系専門学校に行きたい　調理師になりたい

【大学進学志望】―６名（男子２名、女子４名）

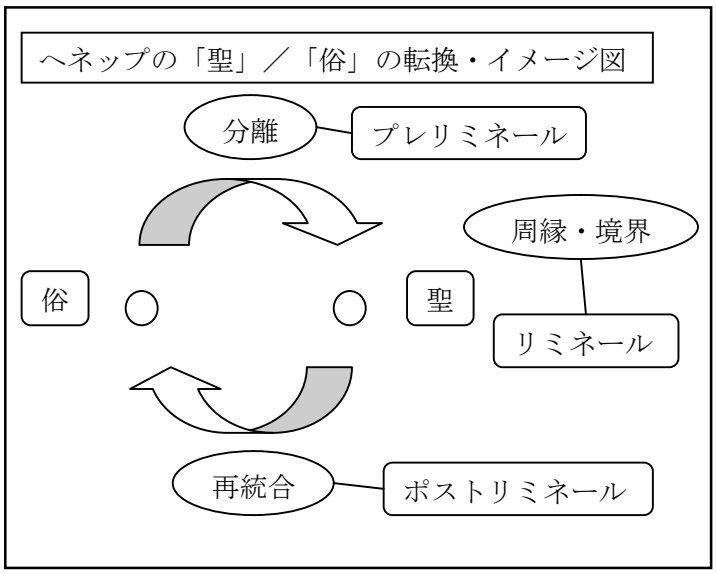
ID：㉑　女子　札幌の国立大学・教育学部志望　高校の社会の先生になりたい
ID：⑮　女子　札幌の私立大学・声学科志望　音楽教室を開きたい
ID：㉜　男子　道内国立大学・商学部志望
ID：㉝　男子　道内国立大学・工学系志望
ID：㉖　女子　札幌の私立大学・人文学系志望　ファッションアドバイザー志望
ID：㊻　女子　札幌の私立大学・保育科志望　保育士になりたい

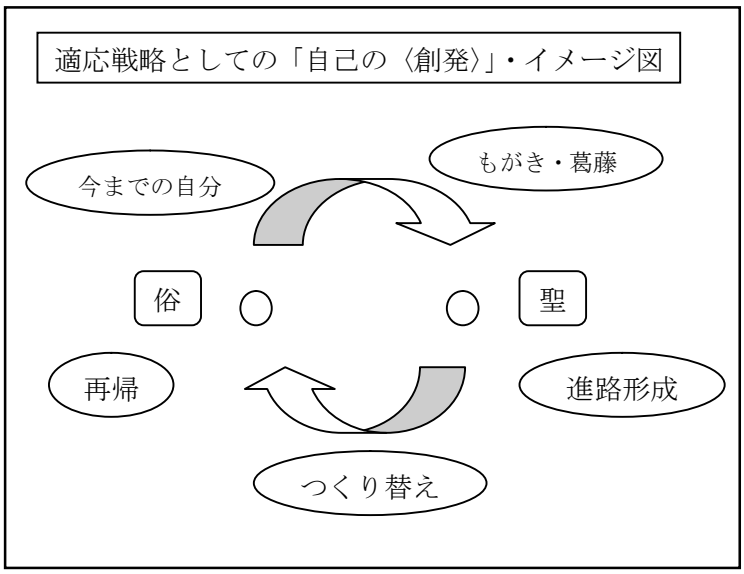
★フェイス・シート（個別の分岐点にかかわる要素としてこの他に巻末に資料も載せておいた）

(3)進路分岐で立ち現われるリミネール

「変身とデビューを通した自分作り[11]」といった形で、現代社会の文脈の中でも、通過儀礼に類するような何かをきっかけにした成熟、変遷が子ども達の中では起こっている。また、学校という場は、子どもの文化形成に大きな影響を与えている。

筆者はA.ファン・ヘネップ（1977,『通過儀礼』）[12]やV.ターナー(1976,『儀礼の過程』、1981,『象徴と社会』)が着目している「聖／俗の転換（ピボトマン）」、「プレリミネール（分離）― リミネール（過渡期・周辺）― ポストリミネール（再統合）」という概念を念頭に置き、援用して考察する。「聖」として設定する進路を含む将来展望、今現在の身近な日常生活を「俗」と捉え、「聖」をめぐっての転換点に、「**適応戦略としての〈自己の創発〉**」が繰り広げられると考える。「過渡期（リミネール）」の境界性の時期に「つくり替え」が行われ、進路形成として「再統合（ポストリミネール）」が現れると考える。





以下、進路分岐ごとに過渡期（リミネール）について見ていくこととする。

（なおフェイスシート以外に資料２として、個別の分岐点にかかわる要素も載せておいた。）

就職志望者

就職志望者は、過渡期（リミネール）において、まず、進学にするか就職にするかという分岐点に立っている。就職志望者５名のうち、４名が日常的にアルバイトに臨んでおり、⑬においては親が働ける状況にないため、家族を支える役割を今から担っている。親は好きなようにしていいと言っているがそうはいかないケース（⑬）、親は好きなようにしていいと言うが自分で背負う負担が大きいことを自覚して就職するケース（㊶）、直接親が就職してほしいと口にしているケース（㊻）と、いずれも、家庭の経

---

[11] 山﨑鎮親，2003,「子どもたちの『門出』と『デビュー』　成長・自分つくり・大人になるということ」,『教育と医学』，慶應義塾大学出版会，pp. 19-25,「身近で具体的な世界なのだけれども、新しい人間関係や新しい環境に新しい自分のスタイルで入っていくときに用いられるのが『デビュー』である。また、門出という言い方が社会の側を基準にしているのに対して、子どもたちの側からとらえ直したのが『デビュー』といえる。」(p. 23)

[12]「“敷居を越えるということ”は新しい世界に入ることを象徴する」とし、儀礼についての考察しており、「私は以前の世界からの分離の儀礼をプレリミネール儀礼(rites préliminaires)とよび、過渡期にとり行われる儀礼をリミネール儀礼(rites liminaires)とよび、新世界への統合に際しての儀礼をポストリミネール儀礼(rites postliminaires)とよぶことを提唱する。」（A.ファン・ヘネップ，1977，p. 17）

済要因と自分の気持ちを相殺させた結果、「就職」という結果を出しているようだ。その際に、「就職」に決めることで、就職する／就職しないという過渡期(リミネール)がひとまず立ち現れている。また、そこで、あきらめているものがある。

優先すべき事項、自分の志向性をどうやって相殺させるか、そして、一旦「自分にとっての進路はこれだ」と決めれば、その気持ちが揺らぐことのないよう、こう構えようという形で、進路に対峙している。しかし、「外で仕事を探したい」という志向を持つ場合、求人によって場所も職種も左右されるため、先の将来がどんなものになるのか、また、そのために「何をしたらよいのかが見通せないという壁」に遭遇している。せっかく勇気を持って「仕事をするんだ」という〈構え〉をつくろうとしているのに、どう構えていいのか分からないでいる。その点、仕事がある程度見えている場合（介護士、美容師、行司）、辛い部分を含んでいるとしても〈構え〉が展望とリンクしている。

専門学校志望者

専門学校志望者は、過渡期(リミネール)においてはやはり就職志望者と同様に、まず、進学にするか就職にするかという分岐点に立っている。そこで、家族の経済状況とぶつかるのだが、彼・彼女らの場合は、その壁を乗り越える、という志向を持っている。㉙を除く３名は、アルバイト経験を有しており、㊱と㊷は、在学中からバイト代を貯めて進学費用を捻出しようとしており、専門学校を選ぶ際には、特待生制度による授業料免除、減免があるかを考慮して進路を選択している。㊾の場合は、新聞奨学生という方法を使って、経済的な問題をクリアしていこうとしている。

専門学校進学を考えている者の場合、親からの援助を期待すること（㊾、㊱、㊷）、夕張に残るという選択肢を取ること（㉙、㊱）をあきらめねばならないこと、心配だけれど親から離れる、もしくは家族ごと移動という選択肢を取らざるを得ないこと（㊱、㊷）など、引き受けなくてはならない過渡期(リミネール)が立ち現れている。また、場所の移動が必然的であるため、外への不安、残していく家族への気がかりの間での気持ちの揺れ(オッシレート)が起こっているようだ。それでも、自分の希望する職業への期待度が高く、その気持ちが生徒達を、過渡期(リミネール)に立ち現れる壁を乗り越えるための〈構え〉へと向かわせているようだ。

大学進学志望者

大学進学志望者の６名のうち、⑮の生徒を除いてアルバイトの経験がない。放課後は部活に使う余裕、また、楽ではないにしろ、子どもを大学まで入れてやれるだけのゆとりがある家庭が多い。そして、全員が夕張の外へという志向が非常に強い。また、専門学校か大学かで迷った生徒がいた場合、先生のアドバイス、親の後押しにより、大学進学へと志向をシフトしており、周りからの厚い期待を背負っている観が強い。

大学進学を志望している者の場合、何をあきらめるか、というよりは、どれだけ気持ちを持ちあげて進路に立ち向かっていくことができるのかという〈構え〉が問われているようだ。その際に、受験勉強においてどこまで学力が伸びてくれるのかという見通しのつけにくさ（㉑、㉝、㉜）、夕張の外の世界へどう出て行ったらよいのか（㉑、⑮、㉖）、外の世界に広がる世界の知識を身につけたい、見通したい（㉝、㊻）といった外の世界と共通のルールを使ってどうやって過渡期(リミネール)を乗り越えるのか、外の世界のルールへの適応をどう図ることができるのか、といった今までの世界からの脱皮的な「つくり替え」に伴う不安が多く見られる。自分の希望を織り込んだ進路形成を行っているのだが、それ

が夕張の外の世界であるために、見通しの利かない環境への適応を迫られており、「変わらなきゃ」という気持ちと「変われるのかな」という不安の揺れ（オッシレート）が過渡期（リミネール）の前に立ち現れている。経済的な要因は、⑮の自分でバイトをして備えるケースを除けば、できれば国立大学に（㉑、㉝）という形で立ち現れてはいるものの、就職者や専門学校志望者に比べると、決定的な壁とはなっていないようだ。

（4）地元志向

＊地元への愛着はあるが仕事がない

生徒達の地元への愛着は総じて高い（グラフ５－１）ものの、生活上の不便さに対しての不満を強く持っている（グラフ６）。地元を離れる理由として、最も多いのは「夕張には仕事がない」、「進学しようと思ったら出ざるを得ない」、「自分のしたいことは夕張だとできない」といった理由である。その前に、「夕張は好きだけど」、「嫌いじゃないけど」、「戻ってきたいけど」という前置きをつけて語る者が多い。育まれた場所への愛着や思い入れはあるのだが、「自分のこれから」を過ごす場所ではない、まず以て仕事がないので離れる場所としての地元への想いが汲める。

＊断ち切る必要のある場所としての認識

また、夕張を離れて出ていくと、地元である夕張はどんな場所になるのだろうか。Ｕターンする気があまりないためか、里帰り的な場所として、夕張を「故郷化」していこうとしている姿勢が窺える。

「㉑*家がずっと夕張にあるので、里帰り的な戻りはあると思いますけど、自分で仕事するとなると、やっぱり今住んでいて不便なところが多いから、やっぱり戻りたくない。*」

「㉝*ちょくちょく帰ってくる、まぁそんな、たくさん帰ってこないですけど、まぁ、お盆とか正月帰って、そん時、遊ぶかなぁと思ってんですよ。夕張残る人と。そういう感じですね。*」

「㊻*退職とかなったら、家でのんびり暮らすとか。*」

夕張には家族もいて、馴染みもあって、生徒達にとっての落ち着ける場所であるにも拘わらず、外へ出る場合は必然的に離れなくてはならない。そのため、地元へ引かれる想いがあっても、それを断ち切らざるを得ない。そのため、進路形成に当たって、自分で〈構え〉をつくり、そのままガーっと進んでいく勢いをつけないと、負けてしまうと考えている者も見受けられた。また、自分の見識を広げるためには「夕張は狭くてやさしすぎる」場所であるようだ。外の世界のルールに乗っていかなくては生きていけないし、そのためには力をつけなくてはならない。環境を変化させて、いろいろなものを取り入れていく必要が出てくる。その際に、夕張は断ち切ること、離れることが、地理的にも心理的にも必要な場所としても志向されている。

「㊱*外に出たのに、夕張に帰ってきたら、きっと、甘えちゃう。私、ホームシックにかかると思うんですよ。札幌に出たら。修学旅行とかいくとすぐ帰りたくなる。親に電話したり・・本当は夕張出たくないから。外をみてというのも、わかるけど、外にでたら夕張には戻らない。*」

「㊻*夕張って狭いから。で、のどかだから。違うところ行って、のどかじゃない風景とか環境にも慣れてた方が、働いた時とかにも役立つと思うし。その方がいいと思います。*」

5. まとめと今後の課題

(1)地方における若者の自立について

＊浮遊と居住が両立できる脱場所化の時代をどう考えるか？

「飛ぶことと根付くこと、浮遊と居住という両立し難い二つのもの」（サン・テグジュペリ『南方郵便機』の「ＢＯＯＫ」データベースより）というのは、一昔前ならば両立が難しいものだったが、現在は両立可能である。１つの場所に居住しながらでも、ネットの世界を浮遊でき、都市の中でも匿名性によって浮遊できてしまう。グローバル化により、浮遊と居住がイコールになる場面も出てくることで、場所性は無意味化、つまり脱場所化するのだ。あえて都市へ行かなくても、浮遊することは可能な時代なのである。このとき、地方と都市という境界は越えることができるのだが、そのことをどう捉えるか、という視角が出てくる。

近代の生活は極めて細分化していて、複数化(pluralization)されている。コミュニケーション・メディアの発達により、都市で生み出された認識的現実定義、規範的現実定義は社会のすみずみに伝播していく。地方においても、意識の絶え間ない都市化に巻き込まれるのだ。「情報の点ではこの過程は、いわゆる『精神を拡大する』ものである。しかし同じ理由により、それは自己の『ホーム・ワールド』の自己完結性と信憑性を弱めるのである。[13]」これは、純粋無垢な地域はもうあり得ず[14]、地域として独自のあり方を示し、完結することの難しさも指すが、「精神を拡大する」という部分をピックアップして考えれば、都市へ出て行くことならではの意味の消失（部分的にだが）とも捉えられる。バーガーらは「『安住の地』の喪失」と述べているが、都市ではない地方に根を張りながら生きていくことが、閉じない形でできる時代とも取れる。

＊2つの脱場所化

本報告では、高校卒業後の進路形成を通しての過渡期（リミネール）において「自己の創発」が起こることについて中心に考察した。この時点での過渡期（リミネール）から再帰的近代の話を捉えるというのは正直難しいところがある。しかしながら、今年度に行った地元で就労している夕張高校のＯＢ・ＯＧ調査から[15]、脱場所化の傾向をかなりはっきりと見ることができた。そこから、現段階では２つの脱場所化が見えてきた。１つ目は、本報告で見てきた「自己の創発」と関わるもので、移動・人生の流動化を促す外向きの進路指導による影響を受けた脱場所化である。２つ目は、地元に留まるからこその脱場所化である。

ギデンズは、モダニティの示すダイナミズムの源泉として、①「時間と空間の分離」、②「脱埋め込み」、③「再帰的秩序化と再秩序化」の３つを挙げている[16]。地元に留まるからこその脱場所化に

---

13 P.L.バーガー・B.バーガー・H.ケルナー著，高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳，1977,「３章　社会的生活世界の複数化」,『故郷喪失者たち―近代化と日常意識―』，新曜社，p. 74

14 田中氏は「地域の地方化」という表現をしている。「それぞれの地域が独自の質を失わされ、中央との関係で成立する単なる一地方へと抽象化されていく『地域の地方化』が進展した。『強さ』の論理が国民と地域に浸透していくことで『強さ』志向の『学力』が主流になり、また、地域に残っていた多様性、すなわち『弱さ』の質が姿を消し始めたのである。」田中昌弥，2005,「『弱さ』の哲学から語る学力―『強さ』の学力から『弱さ』のリテラシーへ」，久富善之・田中孝彦編著，2005,『希望をつむぐ学力』（未来への学力と日本の教育①），明石書店の「第５章　学力論の新しいステージへ」，p. 263

15 2010 年 8 月末に実施。地元企業であるＳ社（３名）、Ｉ社（３名）、介護施設のＳ園（５名）に勤めている方、メロン農家の後継者・経営者の方（６名）の計 17 名を対象に行った。年齢は 19 歳から 20 代後半にかけての若者が中心。

16 「《時間と空間の分離》、社会生活を時間空間面で正確に『帯状区分』するかたちでの時間と空間の再結合、社会システムの《脱埋め込み》（時間空間の分離にともなう諸要因と密接に関連している現象）、および、知識の絶え間ない投入が個人や集団の行為に影響を及ぼすという意味での社会空間の《再帰的秩序化と再秩序化》に由来している。」

関しては、以下のような点を垣間見ることができる。

・夕張にいながらも札幌など市外での友人関係を展開できる
・車の運転による脱場所・脱時間――公共交通機関による縛りを受けずに移動が可能
・携帯電話の普及による連絡の取りやすさ
・コミュニケーション・ツールの発達により、新たなコミュニティ・友人関係の築き方、継続の仕方が出てきている（mixi など）
・地元アイデンティティを核とした「再埋め込み」
・ローカル・トラックの潜在性――実はけっこう外に出てから戻ってきて生活している
・職場の同僚、メロン農家の青年部、同級生、家族（出生家族、創出家族）といった地元での関係性による実存の支え、自立の際のモデル
・文化活動（同僚とジャズ系バンドを組む、吹奏楽部のＯＢ会）

「脱場所化しているからこそ、夕張でもやっていける」という感覚を、実際にそこで身を立てていく中で得ている。また、高校卒業後に進路実現をした後で、再帰的に文脈を組み換えるという作業が彼・彼女らの中では行われており、肯定的な地元志向が語りに立ち現われていた。脱場所化の可能な中、地元で生きていくという道を歩み、そこでアイデンティティとして、記号としての「夕張」を「再埋め込み」しているのではないかと思われる。

（2）地方における高校・後期中等教育の役割の再考の必要性

夕張高校における進路指導は、生徒達の気持ちを外へと向かわせ、自己を「創発」していく上でのテコのような役割を果たしている。地域格差、家族要因の乗り越えをして、よりよい進路を築いていくようにという想いの込められた指導であり、実際に実を結んでいると言える。

その一方で、生徒達を過剰に外へとプッシュしており、「地元で生きていく」というルートに対し、あまりにもネガティブになっている側面があるのではないだろうか[17]。雇用の場が限られているのは事実であり、財政破綻以降、町の将来について明るい展望は持ちにくく、公共料金の値上がりなどの生活上の問題も多い。ただ、実際の「ローカル・トラック」の潜在性が、必要以上に意識の上で縮減されているのではないかという雑感を抱いている。地元で就労するという道筋に関しても、生徒が展望を持つことができる指導を行う必要があるのではないかと感じている。

また、個人化が進み、帰属先を希求する孤独な若者の姿が浮き彫りになってきている中、若者が自立していく過程には、何らかの「場」や「つながり」が必要なのではないかと考える。都市に離脱していった生徒達のその後の社会への浸透過程についても今後調査していきたい。その上で、地方における高校・後期中等教育のあり方について、地方のノン・エリート層の現状を鑑みて何か提起していくことができたらと考える。

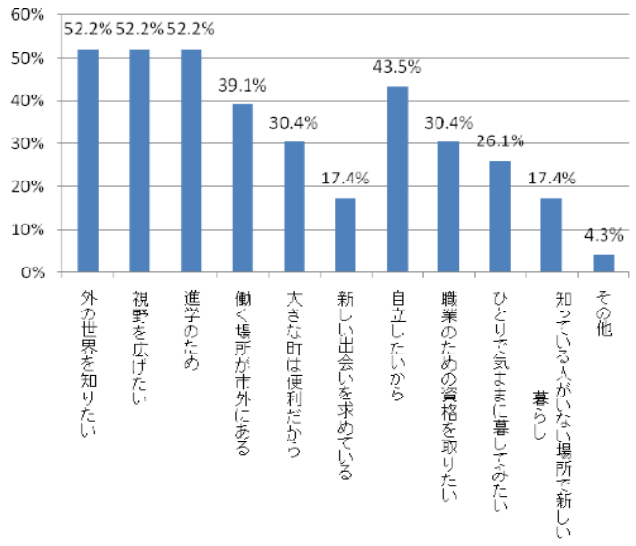
(Anthony Giddens, 1990,＝1993, 松尾・小幡訳 pp. 30-31)

[17] Ｓ社の青年は、夕張高校の生徒がここ数年入らないことから、他地域の高校の先生は、実際に生徒を連れて現場にやってくるのに夕張高校からは来ていない、実際にモノづくりの現場を見ることで、生徒にその魅力を伝える努力を夕張高校側はしてもいいのではないか、連れてきたらきっと入社もあり得る、ということを語っていた。

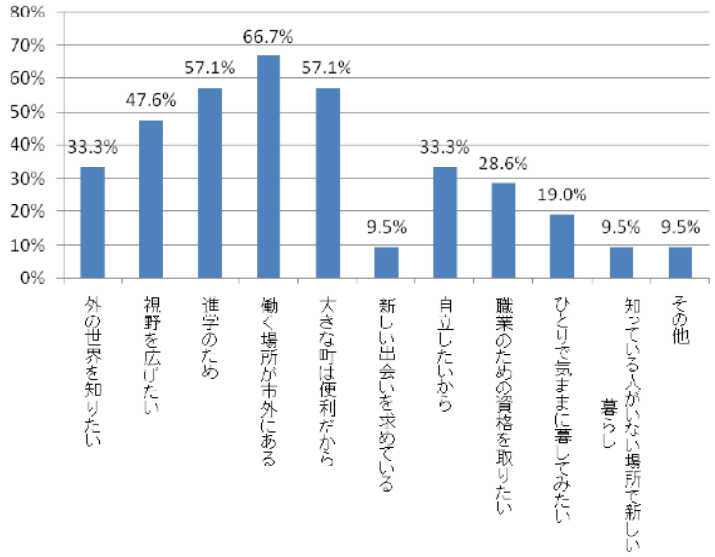
資 料 1

【アンケート調査の結果より】

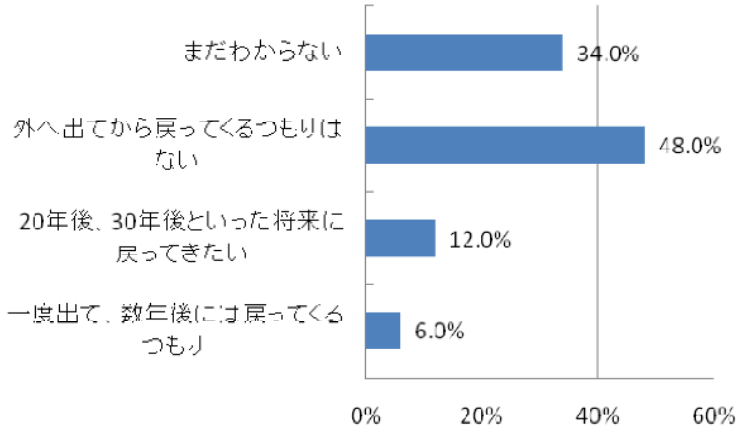
グラフ2　一度は夕張を出て暮したい理由



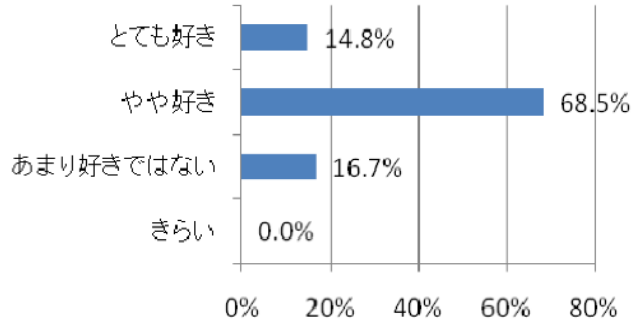
グラフ3　夕張の外に出て戻るつもりはない理由



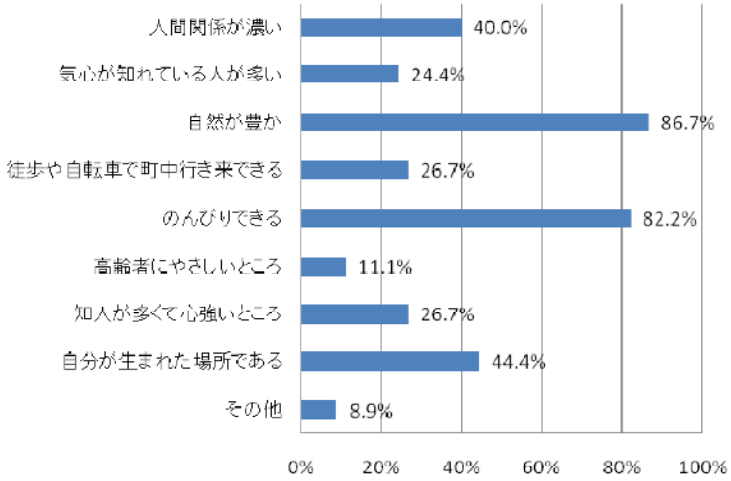
グラフ4　Uターン志向



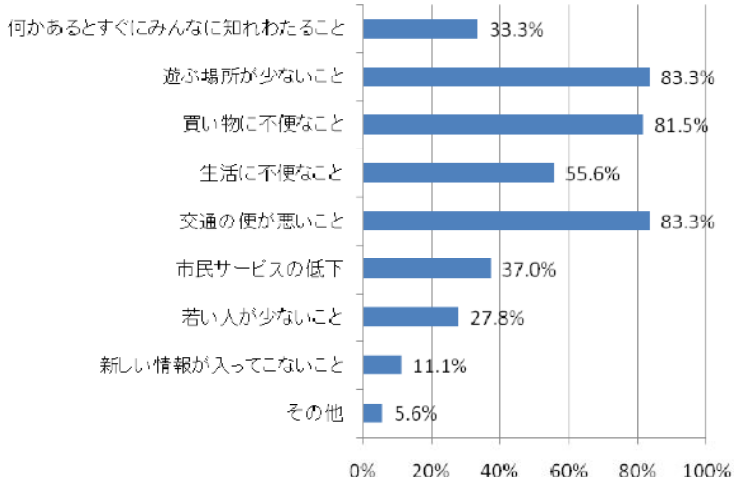
グラフ5－1　夕張市のことが好きか



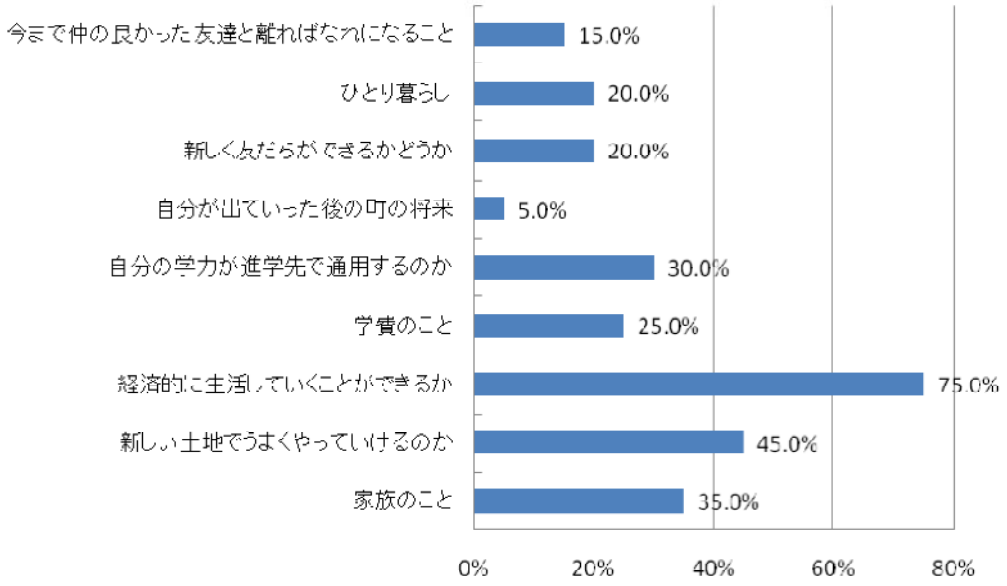
グラフ5－2　夕張市の好きなところ



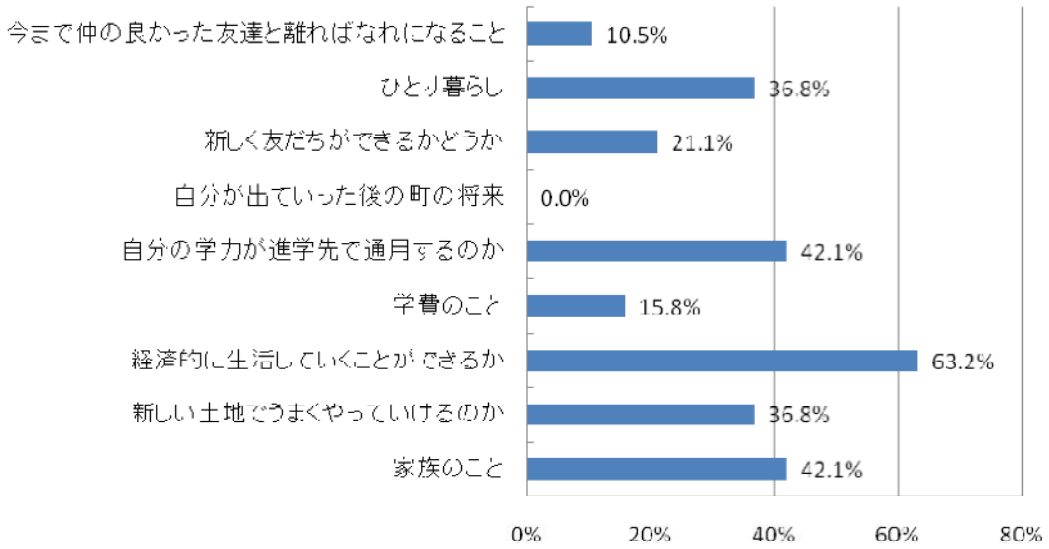
グラフ6　夕張市の嫌なところ



グラフ7　夕張を出る場合気がかりなこと（一度は出たい者）



グラフ8　夕張を出る場合気がかりなこと（戻ってくるつもりはない者）



資 料 2

就職志望者

ID：㉕　男子　体を動かす仕事がしたい・某パン製造会社を受験、結果待ち

㉕の場合は、今までのバスケットでの経験をうまく活かすことができたらと考えていたのだが、実際にはそんな求人はなかったため、実際の求人に対して前向きに志向性、〈構え〉をシフトさせているのが窺える。

ID：⑬　男子　札幌などの発展したところに行って働く

幼稚園の頃から描いているマンガへの志向性を「*それを活かせたらいいなとも思うのですけれど、それは趣味で別でできたらなと。個人で勉強してできる範囲だと思うので。専門学校とかにいって学ぶとかではなくて、仕事して本屋行って本を買って勉強をすればできると思うので。自分で勉強して投稿って形になれば。*」という形で納得し、「*仕事して稼いで家のためにできたらなあって。*」という〈家族を支える自分〉という構えに昇華させている。

ID：㉚　男子　相撲の行司になるために東京へ行く（内定済み）

「*ペンは大好きです。やっぱ絵の道行きたいと思ったんですけど、親に勧められて、やっぱ行司の道がいいかなって思って。個人では決めれないっていうのがあるんで。まだ迷いがあったんで。迷いがあったんで。*」と、絵を描く道を断って、行司になる道に進む〈構え〉に切り替えている。

ID：㊶　女子　地元に３年残って、介護士の資格を取る

「*迷ったことはー、出るか出ないかとかぁ、専門学校に行くか、働きながら行くかとか。奨学金とかもあったけど、なんか、働きながら返していけるだろうかぁっていう、そういう不安もあって、やめた。絶対専門学校行かなきゃ、取れないっていう資格じゃないから。働きながらでも取れるから。（親御さんに負担はかけたくないから？）うん。自分が負担にならないっていう。去年の友達。。先輩も、なんか専門学校行かないで、その就職して、今一緒にヘルパー２級取りに行ってるので、そんなに、働きながらでもやっていける仕事だなぁって思います。*」と語っており、自分で負担していくリスクを考慮して、就職という道を選択している。専門学校に行かなくても資格は取れる、という〈構え〉を選択している。

ID：㊻　女子　美容師の見習いになる　夕張から通勤（内定済み）

「*（親は）お金ないから、就職してお金稼いでって感じで、、、。（これからも）夕張にいて欲しいって言ってます。*」とダイレクトに語っていたが、小学生くらいからなりたいと思っていた「美容師」になる道を捨てずに叶える道を選択し、それに向けた〈構え〉を形成している。また、夕張への愛着が非常に強いのだが、それが、「夕張に自分が残る」ということの意味づけの強化としての〈構え〉のようにも筆者には取れたが、推測の域を出ない。

専門学校進学志望者

ID：㊷　女子　小児クラークになるため札幌の専門学校へ（ＡＯ入試合格済み）

「*えっと、うち片親なので、お母さん一人残してくのが、ちょっと心配。（残ってほしいなぁとかそういうのは？）は、言われないです。自分が目指したいものあるなら行きなさいって言ってくれるので。*」と、残していく親が気がかりなものの、親は応援してくれているそうだ。新しい生活に対して、「*この学校は、すごい行事が多いところなので、できるだけその行事一つひとつ楽しんでいけたらいいなって。*」「*一人暮らしすること自体初めてだから、全部自分でしなきゃいけないっていうのは大変だけど、それを楽しみに変えていけたらいいかなって。自分でご飯つくったりとか、掃除とかも*」など、足元にある生活を大切にしている姿勢が見受けられる。小児クラークになるという夢を叶えるために、経済的な問題を越えなくてはならないが、今現在の生活の営みのようにコツコツと一歩ずつ進んで対処していこうという〈構え〉が見てとれる。

ID：㊱　女子　保育士になるため札幌の専門学校へ

「就職をする」という志向から「保育士になる」という志向へ気持ちを強く持ち替えている。高校の授業料をバイト代から出しており、「*親の生活費がきついときは、私のアルバイト代から出します。*」と家族の生活を支えてもいる。そのため、自分の進学費用を調達するだけでは解決できない問題が残る。「*はじめは賛成してくれていなかったです。保育師になるより就職してほしそうでした。（それはどうして？）今少子化だし、保育師の免許とって夕張にもどってきても、就職がないからだって（母は）言っていました。（お母さんはＳさんに夕張に残ってほしいということ？）いや、そうではなくて、私のしたいことを優先してくれているけれど。もし、私が札幌に進学するのなら、親も札幌に出るっていってくれました。*」と語っており、子どもの気持ちを大切にしてあげたいが、それが難しいこと、自分が夕張を離れるという選択肢を取れば何とか叶えてあげられる可能性があるために、無理をしつつ応援をするという体制を取ることにしたようだ。妹がまだ小二ということ、「*札幌に行ったら（夕張から一緒にでる）友達と一緒に部屋を借りようかと思っています。家賃が半分になるから。*」と本人が話していることから、いずれは家族ごと移動、という道を取るようだ。また、夕張には家族もいるし、愛着もあるためか、「*外を見てから夕張に戻ってくるという必要はないと思う。他の町をみたら、夕張に戻りたくなっちゃって。一回夕張を出て帰ってこないって決めているのなら、そのまま、がーってったほうがいい。（がーってっていうのは？）外に出たのに、夕張に帰ってきたら、きっと、甘えちゃう。（略）外をみてというのも、わかるけど、外に出たら夕張には戻らない。*」と、夕張とは決別する〈構え〉を見せている。

ID：㊾　男子　東京の映画系の専門学校に行きたい　俳優になりたい

俳優というどうなるかわからない職業に就きたいと考えているために、先生からも親からも反対されているが、自分でやっていくことに責任を持つと腹を決め、何とか親を説得したようだ。「*就職の話ばっかりでしたね。（どういうところに就職しなさいとかまで？）いや、そこまでは。食っていけるお金があればいいって。*」という発言から、就職してほしいという親の気持ちが汲めるが、「*卒業して10年でダメだったら、戻ってこいって。*」と親に言わしめるまで、何とか粘ったらしい。新聞奨学生を考えている。

ID：㉙　男子　札幌の調理系専門学校に行きたい　調理師になりたい

バイトをしたことがなく、家庭についてもゆとりがあると答えている。だが、栗山の介護の専門学校と、札幌にある調理系の専門学校のどちらにするかで迷っている。その背景は、「*今までやっぱり、高校生活の中で、祖母や周りの方に助けられた部分たくさんあったので、それがなくなると思うと、不安ですね。*」「*（夕張に専門学校があった場合、札幌と夕張とどちらにするか考えるとすると？）夕張ですね。やっぱり、夕張で助けられて生きてる。たすけ、夕張の中で生きてきたんで、やっぱり夕張で、学校があるんだったら行きたい。*」といった、夕張への強い愛着があるようなのだ。友達との関係についても、「*友達だったんで。友達なので、今まで同じ学校で話してきた人が、バラバラになるっていうのはすごく。。*」「*（夕張に残る子とは？）できれば変わらないでいてほしいし、僕は変える気がないので。友達が向こうでできたとしても、その人は小学校からずっと友達なので、友達としての形を変える気もないし。*」と話している。但し、札幌の町には毎週のペースで行っており、夕張にいても札幌の生活が享受できるから札幌にそこまで行きたくないのかもしれないという旨の話をしており、札幌など外への志向がないというのとも違う。親は賛成してくれていて、「*やっぱり、社会の厳しさ、まだ知らない。。し、いろんなものを、夕張だけじゃ全然、狭いので、外に出ていっぱい見た方がいいって。外の世界を見てきた方がいいよって。（略）自分の好きなところに行きなさいって。なんかどれを、どんな職業取っても、どれを取っても、なんか人生だからみたいな。*」と、外へ出る後押しをしてくれているらしい。彼の場合、ジモティ志向を札幌に持っていきそうなので、何がリミネールなのかはっきりとわからないが、地元への志向の強さと他者への想いを大切にし続けたいという〈構え〉だ

と思われる。

大学進学志望者

ID：㉑　女子　札幌の国立大学・教育学部志望　高校の社会の先生になりたい

学力の不安と共に、「*変な人にからまれたらしたらどうしようとか。*」「*友達できるかなみたいな。小学校入学みたいなそんな気分です。オープンキャンパスとか１人で行ってたんですけど、周りみんなオシャレとか！自分、すごい田舎者！怖い！街とか歩いていてもなんだろ、この人混みみたいな。あまり慣れなくて。どうしても。*」「*夜６時以降でも町に居てみたいですね。６時だったら問答無用で帰らなくちゃいけないから。（略）札幌イコール遊びみたいなイメージがあります。*」と今の受験から解放されて、札幌に出ていきたいという志向を強く持っている。祖母宅には姉が二人いて、一人は短大に通っており、もう一人は社会人で通勤しているということで、身近なモデルがいること、祖母という親族の家が札幌にあるということで、外に出る際の不安は、「大学・札幌デビュー」に際しての適応にあるようだ。彼女は、一方で、夕張である地元は里帰り的な場所となると思っているのだが、発展してほしいとも思っていない。

ID：⑮　女子　札幌の私立大学・声学科志望　音楽教室を開きたい

「*もう夕張にいたくないって言うか、いても未来ないって言うか、自分のやりたいこととか夕張でできるっちゃあ出来るんですけど、仕事とかも出た方があるし、まあいろいろ便利だなって考えて、たぶんもう出るって決めてますね。*」と語っていて、「夕張には未来はない」と夕張を出ることで腹をくくっている。声学科への受験の準備と共に、「*自分高１高２と大学なり専門入りたいなって思って、自分母子家庭なんでとりあえずお金貯めなきゃって思って、部活入らないで、バイトしてたんですよね*」と、アルバイトをして進学に備えている。「*吹雪の日でも学校終わってミニスカートで歩いてたりするんで、帰ってくるのが７時半とかに終わるんで、７時半とか８時に歩いてると、３０分かけて歩いてると、嫌になって何やってるんだろうって。このまま死ぬんじゃないかって寒くて。*」「*飲食店はあんまりやだなって。ちょっとした責任感があるっていうか、一つ運ぶにしても、これ落としたら何円か私の賃金からひかれるんだろうなって思うと、ちょっとしたプレッシャー感じながらやっちゃうんで。*」など、アルバイトを通してのかなりリアルな現実描写をしている。だが、先生や親からの期待もあって、大学に行くことを選択している。母親が道内の公立の短大を出ていることもあるのではないかと察する。進学してからは、経験のある飲食店は嫌で家庭教師をできたらと考えている。経済的な要因は自分で背負わなくてはならないのだが、「*まだあたしがこんなに考えてるのは世の中が不況だから、もっとなんかバブルな感じだったら、どこ行ったっていんじゃねみたいに考えるんですけど。*」と語っている。また、出る場合に気がかりなことは外の人間関係への適応である。どうやって外へ出て、どうやって入っていこうか、などといった外の関係性を探るような、人間関係への目が鋭い印象を受ける。

ID：㉜　男子　道内国立大学・商学部志望

外への志向を示しているという点、大学受験を前に試験に対しての不安を抱いている点では、他の進学者と同じなのだが、「移動」に対しての〈構え〉が異なっている。「*今までずっと両親と一緒に転々としてきたので、一人で暮らすというのが、本当に初めてなのでちょっと楽しみ。小学校３年までは友達と別れたりするというのがあったので、転勤の話が出たりすれば嫌々行っていたのですけれど、もう小学校４年になったら、クラスに嫌な人がいても、まあどうせ３年たてば出れるから、辛抱だろうと。考え方が普通とずれている感じになってきて。慣れちゃった。今まで大体同じように、３年くらいで（どこの場所でも）過ごしてきたので、ちょっと（進学先のO市の）町が大きいからって不安に感じることもない。ただ、不安だらけですよ。センター試験で失敗したら、どこも受けれ*

なくなるし。」と語っている。彼の父親は公務員であるため、転勤が多く、夕張は生まれてから９番目の生活場所だということが大きく影響している。大学に行かなくてはという強いプレッシャーを抱えている一方で、今までの場所を強いられる理不尽さを含む移動から、今回の進路ではある意味自分次第で場所を変えることができる、という点に展望を持っているように思える。ただ、仕事に対しては漠然と事務職をイメージして、見通しが立っていない。文系で一般企業への就職を望む場合、仕事のポジションや役割についてのイメージは持てないため、そう〈構え〉ざるを得ないのかもしれない。流動性に適応するというような〈構え〉に見えるが、メディアの志向（息抜きに関する設問に対しての回答）から、転換願望も窺える。

ID：㉓　男子　道内国立大学・工学系志望

「*プレッシャーかけられるんで、自分。先生から。親は、まぁ、大学とにかくまぁ入ってくれと、言われてるんで。まぁ、頑張ろうかなっと。*」と周囲からの期待に応えようとしている。「*自分が入れるのかどうかっていう、レベルがなんかけっこう高いって感じて。はい。どうなるかって思いました。それに１人暮らしができるのかなぁとか。初なんで。*」「*大学入って学力の方がついていけるのかっていう、はい。どのくらいレベル高いのかなとか、実感してないんで。*」と学力に不安を覚えている。また、「*自分実際進学して、勉強したいことあるんで、働きたいとはまだ思ってないんですよ。だから、進学がいいかなって思ってるんです。*」「*広い世界を感じてから、はい。したら輪が広がるなって。*」「*国立は環境が整ってるし、こいつ国立出たのかよみたいな、なんかそういう有望観みたいのあるんで、国立はいいぞ、みたいなこと勧められました。*」と、進学することで、外にある地域を内側に取り込んでみたいという気持ちが強いようだ。だが、外の発展した場所に定着することについてはそこまでのこだわりがないらしく、「*オープンキャンパスに行ったときに、けっこう、自然が豊かなんだなぁ、だったんで、そこは夕張と変わらず、そこは好きでいいなぁって思ったんですよね。*」「(みんなが夕張を離れることについて) *少しでも外に出て、力つけて、夕張に帰って、夕張のために還元するみたいな。そういうことのためなら、別にいいかなぁって思ってるんすけど。自分がやりたいこと、だから。いいと思います。*」と、地元への気持ちも見られる。そのため、外に広がる世界の標準、知識を取り入れて、自分の世界や輪を広げていくために、受験をクリアしていこうという〈構え〉のようだ。

ID：㉖　女子　札幌の私立大学・人文学系志望　ファッションアドバイザー志望

専門学校から大学へと進路志望を変更している。その際には、先生や親のアドバイスを汲んでいるほか、ファッションアドバイザーの仕事に関わる人の情報をサイトから得て参考にもしているようだ。アパレルという業界を志望する、ということはある程度の大きな町へ行くことに必然的になるため、外への志向を持って臨んでいる。学校に対してよりも、バイトを通して、ファッションアドバイザーになるために経歴を積んでいくという〈構え〉でいる。また、そのような志向を持つ一方で、夕張に対しては「*なんていうか、やっぱりふるさとなんでみたいな。ほっとけないみたいな感じですね。(もっと活気づけたい？) 特になにかしようと考えてるわけじゃないんですけど･･･でも、やっぱり見捨てたくはないですね。*」と考えている。今の段の外へのイメージとしては、「*札幌行ったら、あ、怖いなって思います。人が怖いですね。何て言うんですか、みんななんか自信持って歩いてる感じがして…周りの目を気にしないで歩いてる人が多いと思ったんで。自分は結構、人をこう観察するのが好きなんで…すごい見て、その見た印象で中身とかを考えるってか、するんで…（略）そんでキョロキョロしちゃうんですけど、歩いてる人は全然なんかわが道を行くみたいに歩いてるんで…*」「*自分もそういうあの将来札幌出るって考えると怖いなって思います。(そこになじめるかとかっていうこと？) はい、なじめるかっていうのとそうなっちゃうのかなっていうのと…(そうなるのもちょっと？) 抵抗があります。*」と、札幌の町の雰囲気に馴染めるのか、一方でそこに溶け込むことにも抵抗があるという両義的な気持ちを持っている。

ID：㊻　女子　札幌の私立大学・保育科志望　保育士になりたい

専門学校と大学で迷ったそうだが、「*最初、それこそ専門学校とかって考えてたんで。その時に、（先生から）F女子があるよって話をもらって、やっぱり、今は保育士って決めてるけど、それこそプランナーの方とかも考えてるんであれば、急遽進路が変わった時でも、役に立つ勉強があるのは、四年制の方があるよってことを教えてもらって。*」「*（親は）専門学校って言った時に、専門学校に行くんだったら、同じ二年制でも短大の方がいいだろうし、自分がやる気があるんだったら、大学を目指せるんだったら、目指す方がいいし、ってことは言われました。*」と、先生のアドバイスと親の希望、自分の興味を深めたいという気持ちが、専門学校から大学へと志向をシフトさせたようだ。自分にとっての内／外の世界について「*自分の記憶の中にある町っていうか、記憶の中で歩ける。すぐ、ここ行きたいから、ここ行こうとか、知り合いが多いところら辺までは、中かな。（略）地に足の着かない所が嫌で。*」と語る半面、「*東京とか、修学旅行とかで行って、楽しかったし、また行きたいなって。それこそ札幌より大きいんで、もうちょっと色んなとこ見たいって思うんですけど、でも、出来るのであれば、車で行きたいなって思いますね。*」とも語っており、見通しの利かない移動に際して不安は感じているものの、その先にある色んなところを見たい、という外向きの志向を持った〈構え〉を形成している。

【参考文献】

新谷周平，2007,「ストリートダンスと地元つながり―若者はなぜストリートにいるのか―」,『若者の労働と生活世界―彼らはどんな現実を生きているのか―』，大月書店，pp. 221-52

李永俊・石黒格，2008,『青森県で生きる若者たち』，弘前大学出版会

乾彰夫編，2006,『18 歳の今を生きぬく――高卒１年目の選択』，青木書店

乾彰夫，2010,『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち――個人化・アイデンティティ・コミュニティ』，青木書店

上間陽子，2007,「『伝統』の再創造―エイサーにとりくむ若者たちへの聞き取りから―」,『教育』2007 年 11 月号，国土社，pp. 75-81

中西新太郎，2007,「幼稚になるという成熟―消費社会化と成長・自立像の変容」,『現代と性をめぐる９つの試論―言語・社会・文学からのアプローチ―』，春風社，pp. 6-30

中西新太郎・高山智樹編，2009,『ノンエリート青年の社会空間―働くこと、生きること、「大人になる」ということ』，大月書店

本田雅和，2008,「特集　格差社会の最先端・夕張から―机上の空論、人権侵害の再建計画の違憲・違法性」,『法と民主主義』(2008/10 No. 432)，pp. 20-24

山﨑鎮親，2003,「子どもたちの『門出』と『デビュー』　成長・自分つくり・大人になるということ」,『教育と医学』，慶應義塾大学出版会，pp. 19-25

芳澤拓也・上間陽子，2008,「沖縄の若者をめぐる労働市場の現在と相互扶助ネットワーク」,『貧困・格差問題と教育』(現代と教育 76)，地域民主教育全国交流研究会編集，桐書房，pp. 70-82

Anthony Giddens, 1990, *The Consequences of Modernity*, UK: Polity Press（＝1993，松尾精文・小幡正敏訳,『近代とはいかなる時代か？―モダニティの帰結―』，而立書房）

Arnold van Gennep, 1909，*LES RITES DE PASSAGE*, Paris: Librairie Critique（＝1977，綾部恒雄・綾部裕子訳,『通過儀礼　人類学ゼミナール３』，弘文社）

Peter L. Berger, Brigitte Berger and Hansfried Kellner, 1973,*THE HOMELESS MIND: Modernization and Consciousness*, New York: Random House（＝高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳，1977,「３章　社会的生活世界の複数化」,『故郷喪失者たち―近代化と日常意識―』，新曜社）